五元集 上

へ 5
1834
1

ヘ5
1834
1-3
ヘ 5

晋子一世の奇句ハことごとく五元よ
りくせりといへとも興ある自画し
戯言の句をなしあるハ一片百篇れ
破吟ハ梅巷の曉接店の昏とつ
くも党をしてもはるなと人く
ハこれをもてやして祐よ似あ物
みとしめ吾家との青醴とよふを
ことうれあまりくさうしめあて
編てまして一書となさとのく

長斐集ハ元亨秋書なとさこてしか
集編あつるをかくしの号をかうて
名とよむせられしより二代ハ延宝にはまり
く寶永に終るその間五元をあつさあ
まるゝ故なりしかるに晋子の滅後
にいたつてまれ人乃家にいりしも去れ
もしてえうしも正徳より今延享まて
にこれも又五元を獲りさ何まてその名
乃久しくきこえく此集れ世にかくれし
まるすやこて又国ゆきるくまとし

やしまるおほん神につかふ大徳のありけり
古代の物このみて多くあつめもたれ
中に此書もうけつたへけるがありしひ
ふた宝とめでてよのしぬまでこめおきたら
に絵うくひめんの沾連もゆひけつ
法師をまねる宮奴の杖の端にかける
ありいかなるしろめしるやおもいれりんされ
たまのつらしあまた内志まる此後にたまひ起
よのにも縁を求めて見んするをこふ
めるに大徳うけさる程までもまこくの
くるのしきやうふやきさふつやかりける
を法師をかへて見るこそ法ふいと
あはれいまはもうべし得るやしなし
人ごなき月のうち此かつらのこころきをう
らえあ一字もそとよりこれなれ
先師の妙をかくしめたらんとはおほ
おもひてもしらこのまゝ旅きまこうやや
この法徳よつて授くる人をきくよ余り
よくみすることのなかれいはしめより
旅のひしにこそ書にかくりてこむる

よゆるされねと彼家にゐさしむる
る夜をこめてかへりなけきつゝ
うちそて衣通姫の庭に七日まて
まちさけれし者のこゝろたにころ
さしすやめてさりけんからうしてあさ
つきりすわこひまうひもてかへりたる
よみの紙を中よりわりかたをあふ
草稿のやうよなれる本の墨黒八
十八巻一冊とせるをもて春子丸
手澤にふせうくゝこゝしゝられく

ふかりしくもあはれまもめつらしくもまほ
ろしのかんさしをゑてかへりしこゝちか
らやとおもふもあはれ成へし今はた
しめよりのおねさうへしと櫃よおさめ
くかくまこてとふく家蔵といふに筆
をとりて氷の下なる魚を画くかこ
とく一とをまもくさとうつりて梓に
し世の書子をおもへるへとこゝろ
さしをおなしく　傳わぬ

百萬坊旨原

五元集

延宝　天和

貞享　元禄

宝永

宝晋斎ハ米元章ヵ硯の裏ニ
鐫入たる号也三秊子其硯
を予ニ附属して宝井晋子也
いへる此号遁しくかへりて
筆をすてに求め出るをやって
佐玄龍ヵ額を需てしるかりての

軒葉によりけり
延宝乃むかしめ桃青門に入し
より宝永の万〻歳をのぞむ
いへるにふきしなり

其角

五元集

四十の賀し給へる家にて

御秘蔵に墨をすらせて梅見かな

遊大音寺

んめかゝや乞食の家も覗るゝ

加列小松観音寺奉納

梅の木且那を活て庭おもり

芭蕉翁のゑかけるにかし
うりて絵讃をもとめけるに

せめてものふくべ柿によんめの花

曉
くも上は霜をさまてやむめの花
不曲亭
あせを跡月あても梅の句かな
こつとりと汲のやむ跡ハ藪の梅
あつりしさく枝のさけ目や梅の花
宰府奉納
守梅乃ゐやさとし野花貴
和心 氷推敲之句
きくれるよきさ月なり梅の門

梅津氏 於祖父大坂
表の軍功によりて
御感状 御太刀を頂戴
せられ正月十七日の事とや
依升上杉殿に於て其家臣
十七人とともに御のれつゝて
ても正月十七日読書の興
何も其家督執権として
けふのかえ哉
幡おもえ文臺照やむめの花

えり志珠ゟあてゝしんの
皇を祝ひとりふりし
夜光る梅のつぼみや貝の玉
仁和寺殿守らの亭りゐるよ
其後かりおひめ玉章ぶゟ
沸梅やよ御らとて
升様と手向の梅を捧ぐり
元禄十四年二月九日
聖廟八百齢御忌能
於亨御社頭連誹令
興行一座
新松やあがむる数も八百所
氷肌玉骨とこの花

音なし花のもとなる徳の皮
久松粛山亭にて
桜さく枝岩の星乃台よれ
百八のうへて迷ひや鬨よんめ
芭蕉庵をとふて
咲花や十日をても同しいんめ
こつれあけ菜敷人をのあや
腕押のつよきあらく桜乃花
篇木はおくいそ是ゟやミの桜
咲かわかを延てはつゐらず

止丘隅

うくひすといてあらせん　杉琰
茶臼にとまりける絵に
鶯や砂の色をはなす　日山
茶杓をけづりける絵に
うくひすの曲る枝を削らん
鶯に取たらし　ひさかへる
うくひすや舌はあまり　永運
市隅
竹とらんて鶯あまり　竹尻家
とひあけや
うしとかの
雀子や猫の篠子の笹の露

長嘯の記に源家の館を
とて参ゆきけりて家に
佛を安置し何季を
いとあれや松を二川のあ
はくさわくらんをもよのえ
のこしつる其明をおもひて
去年の古くらんを無下に葉つけ於
正月巳巳布施の弁天へ
請得る芋納
玉椿昼とみえてや布袋庵

梅津硯水會に
窓押やれと払ひところひぬ大寂中
正月廿五日冠里公に侍る
葉刻ミの上手を招る　蕨かな
接木を画て
未おせるの中継とや見てつらん
十一日
お汁粉を還城楽のくれと引
京清ら和帯みせぬや二葉
漸覺春相泥とらふ切句
削らけ膏薬ねりの鼻にあれ

畠ふる沢中よりさしかゝりつゝ
二人しつらのうけ拙ふ
あつミ扇ハきとふこてふ
百人の雪撥志らし蓄を
万葉志らすとも朱雀の柳を
得り所ゝのうしなきを
きらひミハ西の売ふ取れをり
とはつきも龍よ句つる蓄かふ
七種や明ぬふ鉾の枕もと
あて出て流はうつし　鶏鳥
初植の花菜も末ぶり初ひらふ

河州八尾
嫌之しき

渓邊双白鷺

沐よ鷺芹摘は流らふ

うすら氷や口つくよ咲る芹のふ

一声ハかゝらきあより　炊ん芥

石は清な流や　むき硯

白魚や海苔ハ下邊の買合せ

けふや世の中よしあるの里の味

白魚て漁翁ら薗にハあひ添ふ

白き世の罾子に何らはひきら求

陽炎や小塚乃祠に咲そ花

寿くし正月は

ことしより女房もらせん水祝

衆麁入懐の夢をひらきて

引つ迯て松をくいむる鼠らふ

寶引小娼年の角をためくせ

帯せぬて婦ははまし踏歌の宴

雛ぞ人の神の婦をわりて七夕

句を書る海中に大黒天を入

はかゝせたて待ひとつ渓邊より

年始に櫻の口ひらく小摺らふ

三月正當三十日

山吹も柳の糸のはらミかな

梟子あたゝめ目鏡や朧月

連りしや太神宮へ一つゝミ

翁舞や天氣定めて椽下

格枝繪馬合す

こゝし斯螢ゐえより稲荷山

禁園ヲ破りて暇ヲ玉ハルと

破や見惜い紙かひ父乃ゐ花

やふ入やそれはいかもの是か星

亀成

須々しきろえ

故赤穂城主浅野少府監長矩之舊臣大石内蔵之助等四十六人同志異体報亡君之讐今茲二月四日官裁下令一時伏刃齊屍

万世のほしつり萬舌揮ひるゝ肺肝をつらぬく

うぐひすの芥子醋ハあふミ

冨森春帆大高子葉非請竹平これらの名ハ焦尾琴にも載り咲にける乙

黒印半面叢人の字を彫て琴形の中ニ備へタルをはじめて冠里公の万句の惣巻ニ押弘ゐ侍るとて

春の月琴にて書はしめけり

悼後立志　初音八女之

昔くれ初音三井る芝此も

題水

ちく万河ほ乃水や鼓の瀧

画賛

拾得の風巾ふくらむや玉箒

家ふけに侍る水くれる寺

年納

金拝や色書よりても稲荷山

藪入や下てゝあするらし筝

やみ入や牛合ふして大原ミ

元禄丙子のとしむ月末つ方洛東より出山するあるこひ侍り畠中の梅のむつくえに云分許あるかはや蛙のかはをんつけて賠乃草茎なかへしとおとり侍る

草茎を包む葉もあさき雪間哉

堀牛豆をはかり　柳しふ

御忌
人の世や乃どかなる日に濃る林

本多縫殿公にて
春風や草津の鞭のゆめハかり
浅艸川浪舟
河上ハ柳かくれか百千鳥
柳しけハ鼓もうつす景色かな

搦手や柳の曲をつるふ　祖
市川才牛追善
一子九蔵名跡つぎ侍りて
塗顔の兄ハあかきや雛の色
菜苑
黒胡麻てこゝをあへぬか土筆
まゆるやひきしめ子ハ柏はゝし

会所あいさつ

閨の戸のあけあいやは梅の袖

新三十三間堂

花杪やその矢の箭ても来絵　うり

青柳は嫦娥のつまに久しき也

柳上渓の図は

ゆうさ海は洲の翁でも柳かな

傾城の賢なるは柳　の奈

春雨

縄を立てつなぐ時の雨夜かな

此あへゆてうなし　日記

二月十五日上京発足

西行の死出路を旅のはじめかな

涙し再拝十六唯乃る彼岸かな

佛若ニ大晦日に入滅ありて
ゆふ仏ともいはゞ
へきうなる宗生のうめては
往生もふのそのなるらん
佛もふれくの花にけあふ
山里の名もあつしや　作指活
御舞の盆を見んとう　雅花貫
とうら里邑大宗の里ひとう
野嵐のこれをふみつく
竹の先や柳を露ね　落のとう
梅のえやけ一すもふきれとう

二月十七日京驛
西生の勝都のちまきんて参ん
おほくもふ松の黒さに月おわ
影桃の明るき都の居を問て
一指に玉子を送る人あり
けふや雪の玉子十を分む
南都に向そふ　雨
傘や薪の夜の道とふ
無車馬喧
夕日新町の中ゆきみこて下京

見獅子舎有感
まうたうや獅子ハ獣の君として
蝶とふむ也猿をよひ込み逆立
薬屑ふみをつくましこて舞

釈菜
聖堂みこ渡めて牒の桃仍
百とせハねうる薬乃こてふ

柳燕圖
ひるかへる尾をうこかし柳弘
茶のかほ森ふ蔭して　里蘂
画けん
燕やかろく巣をゆく　几中

階子よりかけ上くめにん
海苔の浪をけしかける津ハめぐ
傘しほ娘分さうる　ぬれ燕
賤やひたろ濡れとて日かげ
うつろしでさ〜雛の泪かな
人らとし雛をとらむる犬の声

角田川にて
ありあり見たる雛の声
海苔すく水の急ぎすめ　都鳥
小田のへ寸鍬も柱やひとつ原

あかしてかきつゆる江北星の数
ちんさ行蝦まそめる涓々ふ
帆柱の世みよりかろすやし雀小
苗代や夜沢ハ活する畝伝ひ
をねおろし俵ふ渡す小梯子
景政か片目をひろふ田螺かな
みれ汲みそり行まゝ
孫さく乃蚕やしおふ日向ふ
来る春雨や桒の実ふ酔ふの尾張

治徳 岩城に遅参して
錢谷のの白扇をを脱むる
よし吟じ得ひしふ
松の山や鳶かに浮かぶ時雨
南村千潤仙舟々之来る
の春や猿足も桁路乃志貝
冨士乃絵手のそまれ時り
三 帆舟ハ塩風ふなるゝ涯ゝに
小序 家にかへりしに梅乃小枝に
賤の箕の茎を手むけ人にかけ
旧をすゝめけるつゐて
梅の色をうしろてや賤の竹籬

いせの宮津をも見候ら
冬げかなかしかし
馬に出る事を御門や偲偲師
偲偲師何波の鳴戸をも小舟人

四睡圖

このけらかはねても動くや虎の耳

三尻小酒井村 釣音七子納

蛇の輪や鼾も一つに春日之影

或もるに稀に比丘を
[illegible]
住持乃[illegible]
されば[illegible]五つの[illegible]

能睡 睃が所嗅出ればなりけり

能忘 ちりまも七夕かくし秋の雨

能捕 鶉ると鼠の味を向ては

能狂 陽をと志らうち[illegible]

能眺 蝶のあるあたりあつしし花心

自画

蝶をも噛て子猫をも舐る[illegible]

足跡をつまこゝみ猫や雪の中

猫の子のくんつほくれつ胡蝶かな

市間喧

降けふの手ならし見ゆる雨蛙

長き酔帰の船家の内にて

かひあくんかん
春の夜の女とハ誰にすミれ

宰府兵舘の舟中

菜の花乃小坊主に角なかりけり

醍子桃李の花くへ　挑向し

鶏の卵子にはしろく逆毛かな

王子曲水にまかされて

我呑を烏帽子にきせん岩にて

曙やまたに桃ふかの鶏の声

花はそ桃や菩薩の脇踊

佗しきて雛の室や延寿殿

下てのミや盗まぬ雛ハ松浦舟

おはしまさ木もあり雛社前

雛やさま碁盤にすゑておもひのそけ
　三月四日雪ふりけり

ひなやその佐野のわたりの雪の袖

比のひな清水坂を一目二逢

打菓子や井筒に添て雛のつけ

雛の妻後宮腹しよ浮しげる

永代島八幡宮奉納

汐干やせきとめて来れ次郎貝

頼みよむ沈月を踏ん汐干哉

祇園の鋼鶏つきて汐干かな

桃酌

まとゐしや雛に翁して小盃

曲水の氣違ハ茶碗なり

菓子は金子けし人形也桃の宮

曲水や覧海ら浮る宿なれとも

錦とりて袴ひきずりける雛の皃

こりさせ雛も嫌め虎の母

雛く作也人を知院の榛嫌かな

緑豆（ヤヘナリ）の眼も白し　桃の眉

須磨ハよ所にあむやより合
貝ころへを並べ行に
蛤いしらもはさむら　玉柳

扨露云あつミへ佛浴巻の比
たちかんけのなせうへきよし
御ありて観抱の御書とも
咲かゝりけるとけ
聯息な何の名か仏と山椒ふ
露沾仏佛庭けせ
寐はからな又こと月この初桜
詠めらいこあし思ふや花の庭
地神や彼の弥そい松まつり
花見ん弘母のつれられ　盲児
いさしくら小町ら姉の名ハしらし

黒谷にて
夏の人はちりたる遅桜
仁和寺
いたつらのやうなれぬ桜かな
上野にて
法師て庵借らんと行桜哉
妙境より花道をまし
文ハ読まて桜にしも佳人
花中尋友
饅頭て人をたらする山桜

一重を祇上にと招かれて
初桜天狗のつかひ多き世や
友猿の友きこえすゝ花衣
三月廿日合歓亭にて
山ふかく佛作し寺
佛近きや花のごとくにおかさをかさね
門柳葉をはらふかゝし
らくらくす帰し
佛用よりて児らへすゝむ花の宿
矮屋妻
奴の膝をかるゝのみ
なりけり心まてあり酒を呑て
傀儡の鼓うつなる菫かな　弘

表中郎
面上右西湖

石河氏宜雨公の山庄ニ
美景をあつめて四方ニ四ケ
風情をもてなし給へるふ
二節のたゝハ角豆か山にくゝり
護国寺あそふ為
ふもとにむかふ道て
白雲やもとよ旅行鶯ハ囀ル
立花をあそれ世
咲まはりく主にはへぬ花衣
京よりくるよしもよきて　露香
花よ遊て駕籠よせん都ハ
霞よとすかれ棒つき出る幽山

山桜猿も放れし梢あり
春あそんの噪しげつめん
花ちる時もさそ友ハなかりけり
信徳
花まつて表書院で花月代
春の夜に都ハ暮の盛かな
葉盛もて降るらん妹まで妹かな
また盛なく踏まるるとちらん
世の中の世五年已にあり乃女とそ

目黒松隣堂にて

凉せ床を禁に咲也山ざくら

　通東厳山　三句

小坊主や松にかくれて山桜

八重乃山めさくらや一洗て

人も人を恋の峯やさくら哉

　茅地山かくしを

流星や桜にこめし山かつら

おもり殺生偸盗あるも

ゆるさしと花に五戒の桜哉

行春に大佛殿の花を残り

けるとしかたこのりんを

花を旅人使者の如以て月を待

好子万三てを借して

そのもまあるきしあかりや小盃

酒の付たるよさいらく花を

しかむ人にも

あふ所に漬味みせよし塩桜

泰嵯蒸毛ぶ免露ゆるしけり

　惜花不掃地

　雨休

さくらちる泉生五句ハてすれば

上野清水堂にて

詣ふけても盛のはなさくら

ちる花や踏ぬをいとふ足の心

日論するの備と迷子のゝ
いかし鶯興し部

むまに酒備とも催ん塩ある

一食千金とかや

津毛の何五両せんはなくる鯛

辛未の春上野にあそふる日
門主薨御のよしをきゝて世上
一同に愁眉ひそめしかと

其弥生その二日にてや 山はなくら

花に詣てこの手あく喧嘩買

上野し御

かくり徒士見立る跡乃花見かな

尋花

梅木屋の亭主留やむはいすると

皆ちと清水に遊びて

車にて花見をみんとや 東山

菅笠をきせて似合ん人や誰

酒を壽壽を毒のもんかな

此雨に花見ぬ人や家乃豆

王維山水
寸馬豆人

永代寺池色

池を呑、大江入あひ花の紅
東盛たしめて上京まで

花て濃伊勢を仕まへ〳〵裏柳
大悲心院の花をみんとりて

灌頂の閣よりもて 桜木
茶まふひよは映鏡を 山桜

折とても花の間乃せうれぬふ
沼見鬢や鐙よのゝ原 初さくら
明けの 山鳥　桜角

海棠の花のうへや繊月
小鳥居ハちよるの跡もつくし 山
月雪よ山眠ものよ春よはし
亦是より木屋一ぺんわつし 可
薇咲て謡ふ日をかこへり
且文妨もしぬましむるはい 小
紅葉や龍ある 薇の 楓
心おて序、紀伝んとよ 岩つゝし
よ深ふるん妙石の五位や 薇花
白薇を酢みそまつる　不需ち木

浅艸川首途

秋の花ハ山ん乃瀬や志らぬ

錦にも萩の風を勝らし

三月十二日合歓亭の花
百五十余発く際
ぬかる下駄ま脱ぎて

植足ふ三切の供や山たかく

月さく入相

はしと花乃名おや節扇

秋舵
夜ちるを持らすふ

ゐをぞれや萩植る扇元

龍樹菩薩の禅陀伽王ニ対て
貪欲をいましめ給ふ言葉に
有癡人近猫哩始雖怖後増
苦の文のこゝろを

雁瘡のいゆる時ぞ猶痒し

广新出鈔ニ
一目之羅不能得鳥　得鳥之羅
唯是一目といふのこゝろを

ゐる中に恐ろし猫の網羅

意馬心猿の解

立馬の日を猿の落葉心

花の色白くあつに
なりたき人しみの
かくれけりな

雑司谷にて

山里は人をはつしの花見かな

その三嘯云侍従にありて
宝永二年三月廿七日に
京使にふらぬかを祝して
若宮や九七人米厭より

芭蕉の自画十三懐周之讃

師の坊は十年忌也し　柳塢

気をやあやめ青に未明督
背中の酒起すやおくらき泥
淀舟や松もころもし　龍江
夜言寝覚つるゝや　子観

官城

歴々や下戸の打あし　将督

河東

川むかひふる蚊帳へ　子観
越の鳥啼や明あくつきさ　郭云
晩の水雨をたそかれや　郭云

廬山雨夜

百間長屋にて
時雨人の噂うんちや下水井
不鈍一二の橋乃無限系
阮咸の三味線ぼりし時雨
行廊
時雨あつき傘を買せけり
赤坂山
夜すそてまけ探るの太鼓館
手酌しての用さ月に時雨
寮坊主のまま小麻し　おとたれ

宰府七十納
なとてまる居くとし越はらん
林中不賣薪
せまさくや山時雨断ちつき
はうすすど江さ火村にて
しらふ山村場の日陰や時雨
禁ず五加ぬおくをほどくさに
曲縄人不見
暁の夏吐はなあり　記ム
時雨われや嵐にひくれきん

子をかへは松もかまはず鳴なる
母のおくれ侍りて三とせ
あさゆめのこゑる時
草のかゝる母をとふすか　郭公
松風につゝみを侍して
あはぬハれとて
まの間妹よひくへせちらまはす
素ゑまて
蛤乃やゝまて鳴心ほとゝきす
それよりて松風鳥や　郭公
墨滴を硯に奇之ほとゝきに

白文

人間の四月にふけ逢　郭公
鳴る茄子もこゝの小松原
うけもちあら人の茄子を
ぬかりやされて
郭公憐をもめのとまめかり
自然て勝ぬけ風呂や　郭公
六阿弥陀おけて鳴く子規
淺せ井る樹下
虫つかぬ杏子よらん　郭公
葉末かて画れぬ梅や　郭公
ちらし字は見るの　孤蕉

時なる人を馳走に寝ぬおきぬ
目の上に目をもつ人や　子規

夢昼

妙い目に福笑を従へ新云
姉ヶ崎の野史忠功孝心を
きこしめされて禄をぬつほと
ふるまませ給ふて仰るを
起てみれは晴なる市若記

佛さへこの世にあふしらす
悲しみてやけふは生れもらん
癸歳や母に孝らせて仏生會

風光別我苦吟身

大酒に起てまかりき袷かな
都保屋にてぬきし袷や衣更
一ッとに袷に露や黒木ちか
卯月八日母におくれて
身にとりて衣かへうき月日かな

慈母墓

花みにもやしあへる[illegible]かな
上の方
灌佛や捨子別るある児

花蘂を含ミ
年寄しはえの雲の後から
膠つらり並て哀し　桐の花
夕のたかさ
うられめや異見に凋む夕牡丹
いよ〳〵花も枕かへしの牡丹哉
洞刕龍心寺
楠の諡なかれし　あらん哉
統節孔を
老ぬ炎の襟もこつる牡丹哉

雨意　豔士にめでゝ
ハやきうつゝに気にかゝん哉
池田の御棠子背柏の板状を
あつめて集ありし年
さもあらし用に炎ともほどからぬ葉
下旬如月於中の一日
隠岐殿のうへをつんでやせ瘦山
翁叟百里　全阿甫堂号
上京の時三十三日の吟節之
寛永開元　奉節使
清作喜の人の家にて
とし気て侍せし誰か夜く

屏風に菱房つゐ侘すつるの家

迷ひ子に三位よけし時雨

長崎屋源右ら家に紅毛来
貢の珍く奇なりとして

桐の花も彩波の鸚鵡不言

愛娘子

鷄啼て玉子吸歟ハあかるゝり

席令初めて上京に餞

涼こさも都のそらや

連也金

楊州霍

護国寺にあそふ

水漬に涓てちるや杜若

つまつりし盈く我て二階ゟても

鐘の撲もゆりゆりさつりて

盆すゝ雨に提灯杜若

寺納

みこれ涛寂やうけて杜若

田家

早乙女に足ゆるりて嫌さら

汁鍋に笠のしつくや早苗取

木賀入湯のころ
まそしらや早苗よりかへるさの門
袖裏や茄よりけふ白くをし
舟哥此均しを吹や久茄茄
卯の花や蜻蛉のうら戸の花ん小戸
ものゝけやいつきの御所のかけ諸
寄幻吁　長志
老僧の筍もかむおとの紛
筆ら竹よりおくよ大河ん
竹の尻をこ郭公吹や五月闇

膠下無寸鉄
筆や丈山ふとの鎗の鞘
素堂　居
艸ましき人は皆喰ものと夜の艸
枳子　居
萋艸や家はくれて御用夢
夜草や橋臺見えて何通り
目通の罡の梲や篥たらひ
吐ぬ猶のおむかふよまき第八
粉子つれて一里は休り岡の松
画賛
争たぬ花れ耳やかうかうを

戸塚驛停にて
謡蘇の弥か巳日の旦者於
帆をかけす海ハ眠り瀬くれ
夕塩や家の宿にあけ中かく
あらすり通る船
世中をあら浮てし小蹄うき
飯鄭の鏈あつりよ都於
和之評ニ
伊勢よても松魚あらし　酒逗
ところ葉の名ハ昔まてしらハ於

呈廣江公餞
篶木や人るへいつる五月雨
浮こられや是すも分を通る人
額ぬらす田子の声も月雨
浮こられや千女土の婬乃是原い
かりや傘をはる小人形
さこられを酒匂てかさる和茄子
巖肖院殿乃大法事を
東叡山にて勤こなはル
五月雨の空も休むり法の声

市驛吟

高舟とかる鯉やけふの組

家あやめのほりもちる風ハ

公門に入時

あやめ見く郷陰子乃ことくハ

饒酒を沼まなしる菖らふ

りよもけふあやめもはやめ

うけぬ宿まてあやし

やとしかほうぬ住あれし

新家のへこそおありや伊勢大浦

うおかんし侍う

菖ても蛙のつまはやめ久

けなやうちをさした白髪

二毛の男をやまれて行との

たらひとのこころとのきれ

その人形の風俗を見つま

小気味あとりい行いなし

我むしり坊主ちまや花菖

五月ゐるやしまたせん

家為て

屋根菖と並てかけり菖かな

あひしれ女の塔の床にて

かこうしにかし

山笹の粽やせあて湯かく

さゝ

艸の戸やいつとしのかひ粽

本らし夕へをためて菖蒲

五月十三日

雨雲や竹も酔日乃人あつめ

蔵の菊や金魚まうくるゝ篁

酒満

菖のむ乃酒典童子も二面

青嵐とり不器を

海松よきふ杉の嵐や御嶽山

蝙蝠の屎も子ゝふれあやめ草

交代の葉守の神や初拍

疱瘡あ何とハなき不惜卦

緑槐高處

ちつせミや笛ま黙させ十文字

ありつゝり酒の肴ま這せたり

蝸牛やむしの角乃婚牛

ふりあてや升ま生さうふの

文七ふおすゞ前の多つふ里

河原町まて

妻ゝ家ちりるま小姿告さん

守作まて

川くまや水ま二重のちりる垣

うつきこの絵は
夏虫の暮にこかれる命かな
谷中
風ふかぬ森のしつくや夕かな
僧正名
僧しらす貝ふく僧よ夕ん紀
かやこや蛤根性のかくれ声
露江公淄池の高閣に
志しめて涼を挽んときに
当座にあはせありけるに
夏山に秋ハ御筆とる母かな

宇都宮入道
蓮生ハ寺ハよみものを出掛ひ
樟脳に体をゆつりての鎧かな
よめりせし時の枕か土用ほし
捨人や木蛇にかけて土用ほし
浴衣着て紙貫に似り袖袂
狙公 淄池にて
爪むいて猿にくはするほつさかな
水殿によらはいも絵のしつくかな
手爪やうつむけてわする小毎
底の波水もふてゝ流れかり

亀毛子錢

花の後笠八重とりはまえり

破扇の圖

維光ヶ原祭く捨し扇かな

烏飛鉢の行ふきの花つよし

紅よりちらふのさき乃白衣

せミ帰や木のかりしる國より

隣から付木にくむやせミの声

竹のせミ花らるゝ志ほる時雨

拓うてやせミ言も雁も好
祖

うろひすとかなく

白雨や内侍多かく物詣で

市中白雨とゐふ歌

麦よ香も夕ゐらす腥し

白露やもりをともれを嵐の子

中ゐの化の営あつく盛るる夏

夕立はひとりかゝる女かな

牛鳴三遠の非茄ゆゑ
雨乞するまのみかりけり

夕立や田を見めぐりの非あつき

翌日雨少不

舟中吟

はくらんかの錦陂はるまて里急き

西行と山茶花封すハ居れは
芋あらふ女の跡をつけむし見れは
けんかくの淋しき秋の心かな
土用のいりとかはりの作こし
篠木も茄子かくせるみの秋
鳥山にたもむく人は
青柳やつらむ花ある枝の色は
なのはなや白き鷺垣根より
野焼ハ夕へを志ら世界かな
麻村や家をへよけるの車

国人の隠者参宮しけるに
きぬかけすらて
麦のおきを吉次か冠者に隠さはや
夜の枕に寐姫ぶ病氣の祀かり
生死去来
鳥は姥ハいつくより草の声
捕虎　来坡
七ッ色の姥に乞ましむや足疾鬼
姥の柱に御あのうき槍かるさ
蚊をやくは麋鹿の国の私狸
うやり火や姥かつる方に老猫

更闌

石竹箒好屋に消けり舟引
いまけさにすてんどうと
うちたふされたるさめてハほ

切れたる字ハ誠ら　蚕の跡

旅店

飛土の雪幌ハ酒屋に掛りけり
あるハ大あつくへを二本引
剣て盃とし茶ハ花さくひのまし
肉ハ家に釜てゆふ口ゟむらさ紙
をうらせて白きものそむ

清水の紙李ハ白き面にうつりけり

形目鼻ちからさめんのやうし

浅草河歳て吟涼

此人数舟なれて了とけり三井

川涼ミ郭に泥なる詠りける

涼ミのむ安房や上総に舟ハ恃ふ

すゞしさや帆に船頭のちらし髪

舟暑し眠られのそく團の郭

千人ゟりきき欄干や橋けりけん

涼しさや先あ蘇野の流星

罇退之捨酒吟あるも

酒ありけれ舟きせらしやむすゞミ

てはる

此碑てふ江を哀まぬ蛍哉

牛御前

是や皆雨を吹人すゞみ

橋上休老とふ題に

牛泥む老の齒かゞや橋涼し

舩を玉子でたてくすゞみかな

海を見て涼む角あり鬼瓦

饑久松粛山

筆をさし添笠やかゝす下涼

人のもとめて

涼しいふ躰てつかり朝ゆふの心

画讃

大虚涼し布袋の指さしゆく所

日枝まむかひの不二はいろを

十八の比誹つ雲にて涼み哉

河原にて

洗をも牛にてすゞみ車かな

木枕にひとつ風ありよきすゞみ

勘当の月をおぼろし　涼之比

遊子残月

暑字　いなゝきて

むら雨の東跡よ通る蝉の声

呈戯　露江

供ゝの鞘の暑さや閣の松

人まて暑れ影あり端涼

自棄

きらゝ鶏起昼寝多けき

五月十日　雷雨永代島の

茶店にやとりて

ゆふより神鳴時て鮎の盞

住吉にて西鶴矢数誹諧

せし時は後見よのまかれた

襄の岩を二万句の蝿あらまし

七十余の老翁つれまゐりて我子

さるこそりておくはた子は追

善のるきをもけるとの老翁の

いまそかりけ時さしあたん

まつりんかるまなしすまるにも

おりいよしすして古来稀

なる事子そろいふこともなく

ゆかりさりされを

六尺も力おとしや五月雨

村思庵かれし

年々の秋米江のき社々の由
見ぬふなる霊仏霊神一〻〻を
なり乃ほしめて興廃の御
願訊あらしなるや一よきし当
時の用はふ比の御てらふし
れさうふれて官吏職るのさ
くひやし暑をちゝや日に霍
乱虫氣の比そうかなく悩乃
多くにありては小行程の
遠山を过番まうくまて

海らくる山も振舞水の下向道
　　祇天　和尚けやに

文気にあられ味をけし賣名号

市中・芳

昼顔に来掾涼むゆ氣也
故翁の句を絡ませて讃
のすむ阿りをその絡ハ文良
乃為有書よりもとたくい
ばうゆ人自句を弁結る
文顔や一白乃とす花の宿
　逐歐陽公賦
蠅の子比兄ヲ辞あ子し悩さ也
　画讃
蜻蛉のぬ避とい(い)もし車百合
子供肩とミつまゝ遊文早干

一

薫市凉宵

楊貴妃の夜ハ活たる蝉かな

　七月七日霊文を感して

東湖の蘇州ハ天は清ける子

出無菜豆に欺れても蓮か

荷切や下手ありし切も茎と角

　哥仙貫之の古画に

冠にも指をそふめり哥乃汗

　素流亡妻をいたミて

閨ちからくれや世を家の波

上下と裸の乃多珎　多伝子

あは師家よりあさうは書

　ころ家をたさんせよとおろ

寮や扇の水きを塩根ハ

　とゝ手てあゝふうきうさて

　すこし軍給ひけら扇子

　さんとまゝせるの再ハやうまて

涼ハやる一声すゞく女ふし

　鬼のやうあり清師ミちのくへ

　くだりて祖父神まとゝあれ

　呉例して独りのりとゝ

　介抱せし縁衆生の心て仏よ

　いきしみもとも落されしくしな

糸芸にも食養雌や北留

氏守や桂の生例さへてより

越の人の土産をとめて
光廣卿のうきをかりし合侍り
謂ひにそよふてしたる袍て掛
元角田川牛田をしらずして
いそのかみ清水とくらまのおの橋
脇舟綿よ帰りつて
貫之の鮎のすしとかりまや
まかんけの一句を扇子見れと
生の松かのうしをまた
木曽殿とや源氏味方を思ひより
市原にて
虫たちを朽木の小町 干れなり

手まとゐも林擒八油て面白し
百日乃あらむしや浣ひ鯉
四沖よ弱のけあけや心てん
気のあそ清水のまもの祭りに
七日
幹すめる人の子供ひも祇園
山王の日子のして
新発意天下祭や 土らせ
番附をもらうも 祭の子供ひに
松原よ田舎の祭也 昼侍り

長痩に飢困しかも小食し
とゝ衣は天地を着る夜衣

高閣挑涼

香薷散おりおふつて雲の峯
蝙蝠は宗治のさしや一墨
蝉をきてあす人平
うきし舟の涼しおや中へかまの甲
ねてかゝる蓮にちらふ鶴頸

大雨大風

吹降の合羽にそよく沛後扑